

◎机

文科三年 野 中 し ん

吹く風かをる南窓の下に机を据ゑたり。あてやかならぬ地色に、古代めきたる唐草の模様を施せる机掛もおほひ、右手には硯箱筆立などかたの如くに布置せられ、左手には二三の書冊を載せられたり、かたへには四時折々につけて園生に手折りし草花の一枝を挿されたるなどいど風情あり。静かに窓外に眼を放てば時につけて、とり／＼の眺め面白し、殊に年経にける櫻樹の咲きいづる春の曙のながめはたぐふべきものなし。思へば二とせの昔まで、數ふればこゝに十歳に近き年月、月にあはれを歌ひ、花に懷を述べ、朝な夕な馴れ親みし我が机よ、想ひ起すだにいとなつかし。我が幼かりし頃は小刀細工に傷手を負ひしことありしなるべし、或は鏝てふ恐ろしきもの打ちさゝれたることもありしなるべし、されど更に怒るけしきなくまめやかに事へしこを愛らしけれ、日々學び舎より歸れ

ば今こそ歸り來ませしか、いざ疾く學ばれよかし、といへるがおどく我を待ち顔に迎へたり、さるを一度この地に物學ぶ身となるや、忽ちにして百里の遠きに立ち別れぬ。げに汝は我が無二の友なり、朋友の交の絶つべからざるはいふを待たず、雪月花の時汝を憶ふの心深し、今や一年の好景復た櫻花の時節となりぬ、静かなる田舎は長閑なる春の日に於て殊に静かなり、故郷の春やいかならん、今しも懷を萬古に馳せ讀書に餘念なきをり巻中に朱を點するものあり、是れ何物ぞ、仰ぎ見れば微々たる東風の窓外の櫻樹を揺し、花片を吹き來れるなり、想起す、嘗て故郷に在りて屢々このことありしを、更に聯想す、彼の南窓の下なる机を、机よ、我が學びの園の紫の色香ゆかしき藤波の花は既に咲きそめぬ、やがて實となりん頃は我また歸りて汝と親しまん、げに汝は我が無二の友なりけり、汝の我をばげませし功は今更のおど感謝に堪へず、我これを以て汝を思ふの心切なり、机よ、心あらば此に我が意を諒せよ。

◎雨の日

文科一年二部 武藤キヨシ

朝より、細雨降りしきりて、昨日の暑さはなし。色や、染めし紫陽花の、露をふくめるさまも、緑けふる、木々の梢も、いづれか、なつかしからぬかは。世は、今、梅雨の候に入りぬ。人の心も、おち居て、なにとなう、ものなづかしさのまさるも、これよりなるべく、青柳わくる、傘のゆき、早苗植うる、田子のいそぎなど、面白き、詩景も、これよりまさらんとす。あゝ、雨の日、吾は雨の日を好む。雨の音のしど／＼と注ぐを聞けば、世の歎、煩、消えはて、我心静なるこそ、嬉しけれ。我身の程も顧み、遠き昔をしのぶも、かゝる日なりけり。あゝ、雨の日、わがなつかしき思出も、亦、雨の日に多し。吾末だ、前の學校にありし時なり或る夜、ふと眠られぬ折しも、軒より落つる玉垂の、何あたりてか、ピアノの如き、小さき、軽き、音たつるが、遠く、近く、降りそゞ雨

に和して、高く、低く、俄にせまるよと思へば又ゆるく揚りつゝ、うつりゆく調の、歌ぶが如く、咽ぶが如く、あはれに、妙なる雨の樂に、一夜酔ひにし樂しさ、翌朝起き出で、見れば、昨夜のピアノは、瓦の片のかたへに、誰やらの忘れし、金盃なりし、をかしさなど、今に忘れられぬ夜も、かゝる、五月雨の頃なりしよ。今年春、此學び屋に、入らんとて、我が家出でにし日は、風まだ寒き越の空に、雨いたく降る日なりき。悲喜わけがたき、我が胸の、ふり添ふ雨に、いかばかり、みだされけん。あはれ其日の思、われ、何時の日か忘るべき。近くは、先づ日曜日、久しく、西國にありし祖母の、歸國するとて、此地によりしを、訪ひし日よ。其日も、雨は降りけり。名残惜しき別に、歸るさは、心も空にて、江戸川より、こゝまで、電車に、三度も乗換せしをかしさも、足袋、袴など、泥にまみれし困みも、今思へば、なつかしき思出なれ。雨の日のなつかしさは、たゞ五月雨の頃のみ